

# 『樹より高く 昇ろうとした少年』

森 本 正 昭

私が散歩をしているときのこと、子供が一人、ジューッと私を見つめていることに気がついた。その子は幼稚園児くらいの年齢であったかも知れない。ブランコに乗ったまま私を見ている。団地の中にある小さな公園でのことである。私が通り過ぎようとする、何かを訴えるような表情がまだ私を追ってきた。そうすることのわけが分からなかったので私はそのまま通り過ぎようとした。通り過ぎてから少年の表情を思い出すと、私はその場所に引き返し、少年の乗っているブランコの所まで行ってみた。よく見ると、ブランコがおかしい。つり下げたあ

る紐ひもの部分が大変短くなっている。紐といっても鉄製の鎖なのだが、つり下げている太い柱を一巻きしている。それで、座る板がずいぶん高い位置にあるのだ。それでその子はそこから飛び降りることができないのだった。

「ボクは降りたいのか」と確かめると、「うん」とだけ答えた。おそらく誰かに助けてもらおうとして、その近くを通るオトナにじつと視線を投げかけていたに違いない。

その子の身体を両手で支えてブランコから降ろしてやると、その子は助かったという安堵の表情をみせた。

「どうしたの」ときくと

「中学のおにいちゃんがした」と言った。中学生のいたずらである。

私はしばらくその子と一緒にいた。何かを問いかけて、短い答えを聞いた。

「名前はなんというの」ときくと「シヨウタ」と答えた。

「本当！ おじさんはシヨウジというんだ。似てるね」と言うのと少し目を輝かせた。

この子の表情を見ると、それは小さい頃の私そのもののだと思えた。

困ったことがあっても、すべて自分で処理しようとした。助けて！と叫び声を上げれば、誰かが助けてくれたに違いない。それでも私は声をあげない。一人で解決しようとする。決して独立心に富んでいたというのではない。おとなしい子なのだ。それは少年の日の私そのものだった。

私の空想癖が掻きたてられた。自分がここにいて、目の前に少年時代の自分がある。戦時下の異様な状況下にあった幼い自分、その満たされることのなかった生活が思い出された。そこから救いだしてくるものはないものか。今に見ろと思っていた。今日はここで少年時代の自分に出会い話しかけることができたのだから、うれしいことだが、次には何をしたらよいのだろうか。

SFでは、二つの魂が繋がっているとすると、幼い子の自分がケガをすると、大人の私の身体に傷跡が残るはずだ。幼い子の自分が亡くなると、大人の私もたちどころに死滅する。そんなことありうるのだろうか。大人の私はこの歳まで生きたのだから、この子もこの歳まで生きるのか。そりゃ大変だ、何しろ私はあの満州で暮らしていたこともあるんだからな。うれしいこともあったはずだが、嫌なことしか覚えていない。なんとか嫌なこと

を全部消しゴムで消して、うれしかったことだけをこの子に託すことはできないだろうか。

いくつかの思い出が頭をよぎった。消しゴムで消していない不快な部分がいくつも残っていた。

小さいとき同じようなことがあった。木昇りをしていたときのことだ。ずんずん昇っていく。気がつくとなぜぶん上の方にまで昇ってきてしまい、下の方を見ると急に怖じ気づく。誰も助けてくれそうな人はいないし、いたとしても助けてとは言えないのだ。なるべく平気な顔をして動かないままにいる。そして誰もいないことを確かめると、どうしようかと深く考える。どうしようもない。いい考えが思いつかない。時間は刻々と過ぎていく。最後はどうにでもなれと思つて、両手で木を巻くようにして滑り降りる。手や身体をひどく擦り剥いてしまったけれど、痛いとも言わず、誰にも気づかれないうちに家に帰る。手と足がじんじんと痛み、血がにじんでいた。顔にも擦り傷ができていた。それでも何事もなかったかのように静かにしている。私はこんな少年だった。

その後、この公園の横の道を通るとき、あの少年が今

日は来ていないかなとブランコのあたりを目で探してみ  
るけれど、一度も彼の姿を見たことはない。

あの少年の日の自分はどこへ行ってしまったのだろうか。  
か。

小学生の頃のことだ。夏休みになって、学校はお休み  
になっていた。今日から行かなくてもよいのだ。しかし  
私は家には遊んでくれる人もいないし、やることもない  
のでなんとなく学校に出かけた。裏門を入ると、校庭に  
は誰もいなかった。子どもたちの賑やかな声は今日ばか  
りは聞こえない。校庭はなんだかしらじらとしてい  
る。暑い夏の日差しが照り返っている。私は手持ちぶさたに  
校庭にある遊具を一つ一つこなしていった。鉄棒にぶら  
下がって、ぎこちない逆上がりをやってみせた。次に少  
し移動すると肋木があり、雲梯えんぱいがあった。こんな物、簡  
単さと小声で言いながら、雲梯を始める。中段まで行く  
とつまらないなといいながらボタンと降りる。肋木は  
至って簡単で、上の方まで昇っていくと、もういいや、  
とズルズルと下に滑り降りる。

その他には、相撲の土俵があつたけれど、これは子ど  
もたちに最も人気がなかった。それで脇を通るだけ、土

俵の側面にあいている穴につま先を突っ込んでみる。蟻  
があわてて這い出てきた。最後は蘇鉄ソウテツの木に上がってみ  
る。ソテツの実を食べる人もいるが、毒があるから食べ  
ない方がよいと先生が教えてくれたななどと思い出して  
いる。

ひととおりのことが終わると、誰も遊び相手はいない  
し、夏休みの学校は面白くないなとぶつぶつ言いながら、  
家の方へ走って帰るのだった。

夏休みには海や山に家族で出かけるとか楽しみが多い  
はずであるが、当時は戦時下だったので、家族で行楽に  
行くというようなことはあまりなかったのではないかと  
思う。私の家では皆無であった。だからつまらないので  
はなく、これが意外に面白かった。私は自分なりの遊び  
方、ひとり遊びを考えるのが好きなのだった。それで誰  
もない校庭は、私一人だけの広い遊び場だった。

校長先生がいつも話をする演台にかけ上がる。校長先  
生はしゃべり始めるとき、誇り高き大日本帝国の少年  
少女の皆さん、という癖があつたので、その真似をする。  
「今日から楽しい夏休みです。元気に遊びましょう。」な  
どと言って台から飛び降りる。そこから学校の玄関口ま  
で何歩で行けるかを数えてみる。一回目は45歩、もう一

度やってみる。あなたは進歩が見られますかと自問自答して、もう一度やってみると今度は40歩、良くできましたというとそのゲームはそれで終わり。それにしても校庭はいつも乾燥していてザラザラとしている。滑るようにして歩いていけば、30歩でも行けるに違いないと思いつながら、このゲームは今日はお仕舞いにする。

校庭にある木では蝉が鳴き始める。ミンミンゼミはせわしく鳴き、クマゼミは重々しく鳴く。身体も重戦車といった体つきをしている。

私は蝉を捕まえたりはけつしてしない。何処で鳴いているのかを確認するだけだ。あまり近づきすぎると、小便を引っかけた逃げ去るので要注意だ。蝉は7年間地中にいて、7年目の夏に地面に這いだしてくる。しかも一週間しか生きていないと聞いた。すごい奴だ。そう思うと昆虫採集などやれるものではない。

家に帰ると、裏庭の通路を箒できれいに掃く。箒の跡がきれいに残っている状態になるまで、きれいにする。そうすると、祖母が顔を出して、ホー、きれいになったねとほめてくれるのがうれしくて、いつもこの作業を行う。

学校の横に大きな邸宅があった。樹木が茂っているの

が見える。周りは古い土塀に囲まれていたので、外から中の様子はまったくうかがい知れなかった。どんな人が住んでいるのかも知らなかった。その家に行く用はないので、関心もないのだが、ボールが飛び込んだりすると、ボール取らしてくださいと言ってその家の玄関を叩くことはあったかもしれない。でもだれも出てこないのだからボールが飛び込むとそれでボールがなくなったのに等しくボール遊びはそれで終わりになった。なんでも恐いおじさんが一人で住んでいるという噂であった。

誰かが視野の中にいて、自分を見てると感じるときは、自宅に走って帰るのだ。でもそうでないときはやることがあった。私はスースーと砂場を駆け抜ける。その先に運動用具の小屋があり、その裏側に下水口があった。柵がしてあるのだけれど、その中に入り込むことができののだ。入り口はなにか汚らしい感じなので、そこに潜り込む者はいない。しかし潜り込むと、排水溝が奥深く続いているのだ。無気味なのでその先を追求する者はいない。私はその先に何があるかを知っていたが、誰にも教えなかった。土管の中を体を前屈みにして進むとやがて暗さがしだいに明るさを増し、明るい出口を見ることが

になるのだ。

この通路を最初に発見したときは驚きだった。出口には意外に簡単な木柵があった。そこから老人が犬を連れて歩いているのが見えた。庭はとても広く、その中に道が造ってあり、老人は犬を連れてその道を歩いているのだ。じっと見ていると不思議な感覚が私を支配した。老人が犬を連れていてではなく、犬が老人を誘導しているのだった。待てとか進めとか言っているのだけれど、犬は言葉が分かるのかそれに従っていた。

私はうっかりくしゃみをしてしまった。老人は誰だ出てこいと言ったようだった。木柵だけかと思ったのだが、鉄格子がはめてあって出ていくことはできないのだった。そこに老人が近づいてくることが分かった。どこから来た。というので、学校から来たと言う。来てはいかん。ここには入れんことになっているという。犬はおとなしくて、吠えたりはしなかった。

私が立ち去ろうとしていると、老人は何を思ったか、まあいい、入ってこいと言うと、柵の留め金を外してくれた。柵が開かれて一步を踏み出せば老人の庭の中だった。入ったら最後、危ないことになるかもしれない。ためらっていると犬が私の上着を引っ張るようにした。

庭は広くて樹木に覆われていた。小道には赤や黄色の花が咲き乱れていた。

遊びたければ、遊んでいけ。と老人は言った。

老人の目は見えないのではないかと思えた。

後で分かったことは、戦争で失明し、内地に送還されたこと、陸軍病院で治療と盲導犬による訓練を受けたこと、などで、盲導犬がいれば、自由に動き回ることもできる。しかし犬がいないと、まるで何もできないように、壁に手を広げて少しずつ移動していくのだった。

子どもたちは、そこには怖いおじさんが住んでいる。怖いどころか、ものすごく怖い人だという噂であった。あるときボールが邸内に入ってしまった。それでボールを取らしてくださいと何度もその邸を訪れたのだが、返事がないか、入ってはならんと言う返事を女中さんから聞かされた。それで子どもたちはそこにボールが入り込むのを恐れて、もし入ったらそれでゲームは負けになる規則を作っていた。この家には子どもたちのボールがたくさん入っているはずで、ある時、まとめて20個余りのボールが袋に入れて、学校に返されたことがあった。

何が怖いかというと、大柄な身体、大きく飛び出した目、大きな声で罵声を浴びせる。手に竹刀を持っていて

振り回している。ある小学生はお前の年令を言えというので、10歳と応えると、竹刀で10回ぶたれた、しかもところ構わず打ち込んだという噂が立っていた。またどう猛な犬を飼っていて、吠えたり、飛びかかって来るというのだ。お手伝いさんも同類で鬼のような人だ子どもたちは噂をしていた。

その犬は元気にはね回っているときと、まるでおとなしく主人に寄り添っているときがあった。はね回っているときは、尻尾を振り回して、私にくんくんと鼻を寄せてきた。おとなしいときは、まるで知らぬ存ぜぬという素振りを見せた。後に知ったことだが、盲導犬とはそういうものらしい。自由にいるときは私と遊ぶことがとてもうれしいらしいのだ。庭中を走り回っていた。

私はこの下水道をくぐり抜けていくとき、いつもワクワクしていた。その先に別世界が展開していたからだ。まず、美しい庭園が広がっていた。季節にもよるが、花が咲き乱れていた。樹木も庭の美しさを引き立てるかのよう配置されていた。木登りが好きだった私はめぼしい樹に目をつけておいた。次にこの屋敷に登場する人物はいつも同じであることに気がついた。身体の大きい男

の人、やさしそうな女の人、それに大きな犬が一匹、これがすべてであった。これなら男の人、女の人、犬の順に支配関係が成り立っていきそうなものだ。しかし、ここでは、犬、女の人、男の人の順に偉らそうに振る舞っているのだ。庭の中の小道を三者で歩いているとき、犬が男の人を先導し、女の方は、離れたところから何か知らない言葉で声をかけているのだが、犬は賢くてその声にかまわず男の人を引つ張るようにして歩いているのだ。

やがて分かったことは、男の人は盲人で、ひとりでは危なっかしいのだが、犬が先導しているときはまるで目が見えるように振る舞うのだった。今日でいう盲導犬・介助犬のはしりだったのだ。その犬は紀州犬で名前は「福丸」と呼ばれていた。全身が白毛で覆われがちりした体型をしている、利口そうな表情に穏やかさも感じられた。

おばさんは女学校の音楽の先生をやっていたことがある。ときどきピアノを弾き、同じ歌を何度も歌ったりしていた。そこへ私がふいに登場すると、大げさに驚いて、一体どこから入ってきたの不思議がった。むしろ闖入者の登場を楽しんでいるようでもあった。これも後でわ

かったことはおばさんは耳が遠いらしく、私が近づいて「今日は」といっても聞こえなかったのだ。音楽の先生で耳が聞こえないのはつらいことだったに違いない。

ところで私は分数の計算ができなかった。それでわかりにくい分数の計算問題が宿題に出ると、この先生に見てもらいに行ったこともある。楽譜に書いてある拍子記号と音符の記号を使って教えてくれたこともあった。それは大変分かりやすい方法であった。そんなときでも犬は私を遊びに狩り出そうと狙っていた。おやつを犬と分け合って食べたこともあった。

怖いおじさんと子どもたちが言っていたのは、義眼を着けていたためだと思う。その義眼が気に入らないのか、手でたえず目のあたりを触っていた。義眼を表裏反対に着けていることもあり可笑しくもあったが、私は何も言わなかった。戦場で弾丸が目の前をかすかに通過しただけだけれど、何も見えなくなってしまうと、嘆きの声を聞くこともあった。外に出るとき、義眼を着けていると出会った人を驚かすため、外して出掛けることが多かったようだ。暗いところで出会った人は顔に包帯を巻いているだけで怖ろしいものを見た気がするのだった。

お前は下水道を這ってくるのか。まるで「どぶネズミ」

だな。この家には犬の他にネズミもいるわけだ。堂々と入り口から入ってこい。とおじさんは言った。

しかし、耳の聞こえない人もいて、入り口の戸を開けてもらうことができないのだ。

兵隊さんも下水道を這いつくばって前進するんでしょと話をむけると、「そうさな。敵前上陸のとき、わしは立ち上がって後ろを向いて前進！と号令をかけたとき、前方の敵陣から撃たれ、弾が目の前をかすっていった」と聞かされた。

帰りは下水トンネルルートではなく、表の木戸を開けてくれるのだった。

この犬は盲導犬だから、盲導犬の役割を果たさなくてはならない。いつも主人が側にいるので休息はないようだった。しかし私の姿を見つけると、盛んに尻尾を振り振りしたり身体全体で喜びを表現してくれていた。なにか少しばかりの餌を持って行った。犬はそれを楽しみにしていたようだ。何もなきときは手にきな粉の香りをつけていくだけのこともあったが、それでも喜んで手をなめていた。

しかし盲導犬にこのようなことをしてはいけないらしい。役割がおろそかになり、主人が危険にさらされるこ

ともあるからだ。それで主人は叱りつけていたけれど、おばさんは私が行くことを喜んでいるようだった。

突然おじさんは「お前は将来何になるんだ。お前のお父さんのように軍人になる学校に行くのかな。どうするのだ。兵隊にはなるな。戦争に行くのはいいものじゃない」と言っていた。

あるとき庭で一番高い樹に昇ってみようと思った。昇ると、学校が一望できた。見下ろす感じは人を愉快にする。なんだ、ちっぽけな学校じゃないかと思うととても愉快だった。さらにどんだんに昇っていくのは危険なのは分かっていた。福丸がうるさく吠えていた。老人は目が見えないので何も言わなかった。ここではだれも助けてはくれないという現実を知ることになり怖じ気づいた。昇るのは簡単だが、降りるのは怖じけた気持ちがあると降りることができないものだ。それでも先端に近いところまで昇ってみた。そこまで昇ると遠くにかすかに海が見えた。広い海を見るため、もっと高く昇ってみたものだ。

ある日、突然この家は異変に見舞われた。米軍による空襲で家は焼失してしまったのだ。突然というのは当然

らない。空襲があることは充分予測できた。米軍の偵察機がこの街の上空を何度も旋回し、航空写真を撮っていることを市民が目撃していたからだ。空襲のあった日、おじさんは観念したのか、家から逃げようとはしなかった。自分は帝国軍人の一人である。コソコソと逃げることはできないという言い分である。どうなってもかまわないと思っていたに違いない。しかし、盲導犬の福丸はそんな主人を懸命に吠え立てて、逃がそうとしたという。主人の着物をくわえて引つ張った。家に火が廻って自分が危険になっても福丸は主人を引きずり出そうとした。おばさんもそれを助けようとした。それでじよじよに家の外に出た、庭に出た。まずは大きな楠木の下へ行った。降り注ぐ火の粉を避けるだけの空間がそこにあり一安心している、もう一度、今度は庭先に直撃弾が落ちた。老人がいつも椅子に腰掛けていた場所だった。さいわい難を逃れたが、福丸も入れて三人とも火傷を負った。次に向かったのは私が通路にしていた地下道だった。こんな所に爆弾が落ちたら、生き埋めだと以前に主人が言っていた。しかし火勢を避けるにはこしかない。福丸はそう感じたに違いない。おばさんが庭から通路への出口を開けようとしたとき、火勢が一層強くなったのだが、

福丸は主人とおばさんを地下通路に運び込むと、安心したかのようにそこでぐったりしてしまったという。人間も同じありさまになった。そこは私が楽しみを抱いて通った通路である。福丸も私が来ることを楽しみにしていたに違いない。それでその通路に家族を運び込んだのだろうか。私があるときそこに現れることを期待したのかも知れない。しかし私は私で、家族と一緒に赤々と燃える空襲下の市中を逃げ惑っていたので、おじさんの住む屋敷に助けに行く余裕はなかったのである。

おじさんの家族と犬は命をつなぐことはできたが、福丸は火傷と体力の消耗が激しかった。それから半年以内に次々に命を落とすことになったそうだ。家は完全に焼失し、美しかった庭も見る影もなくなったという。大きな楠木は半面が焦げてしまいいよれよれになったが生き残っていた。

おじさんが亡くなったあと、この邸宅はしばらくそのまままで荒れてしまったようだ。戦後かなり経ってから、私はこの地を訪れると、そうそれは私が大学生になって都会の学校に行っていた頃だった。この屋敷はいつのまにか姿を消してしまっていた。周りを取り囲んでいた築

地は完全になくなっていた。庭園の一部が小さな市立の児童公園になっていたが、昔の面影を残していたのは大きな楠木が残っていたことだった。この樹によく昇ったことを思い出し、私はじーと眺めていた。するとしだいに奇妙な空想に浸っていった。

私はあの屋敷の中の庭園にいた。前面にある大きな樹を眺めていると、戦禍に遭ったその樹は大きく変形していた。樹の直前に爆弾が落下したためか、幹の部分がぐるり取られていた。そこから後方に枝が伸びていたのだが、それが樹の枝ではなく白茶けた道ができていたように見えた。そこを辿っていくと樹が遠く高く枝を伸ばしていた。先端が細いのでまるで遠近法で書かれた絵画のように遠くまで道が続いているように見えた。

私たちは前方に行進して行った。先頭は犬の福丸、その後ろにおじさんが意外に元気な姿で続いた。その後はおばさん、次は少年時代のボク、最後は大人の私だった。全部で犬が一匹、人が四人だ。以前と違うのは一人増えたことだった。何故増えたのか私は気がつかなかった。僕たちは楠木の前面から入りこみ、元気よく前方に進む。樹が高く聳っていたのだが、ある高さを超えると行列は一人減り、また一人減りで少なくなっていく。気がつ

いてみると行進しているのは私だけになっていた。

